話しかける都市環境プロジェクト

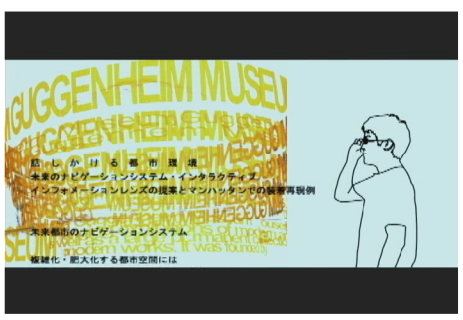
BIG APPLE Project

2001

2001年8月から9月まで神戸国際展示場で開かれた「21世紀☆未来体験博」に出展した作品です。過去に行われたプロジェクトのデータを利用してNewYorkの街を再生し、最終的にはA0パネル1枚とムービーを製作しました。

Concept

この作品では、架空のナビゲーションシステムを提案しています。複雑化・肥大化する都市空間には人間とのインターフェースが必要です。都市は基本的にパッシブであり、都市を楽しむにはそれなりの「知識」や「経験」が要る。このプロジェクトでは、提案する装置を装着するだけで都市がいろいろなことを語りかけてくれます。作品のシーンは未来のニューヨーク。主人公が架空の装置「インタラクティブインフォメーションレンズ（IIL）」を装着しニューヨークを歩き回りながらレストランを探し、建築を調べることを想定しています。



Augmented Reality & Ubiquitous Computing

この装置は、「Augmented Reality (AR)」と「ユービキタスコンピューティング」の技術を応用した、都市のナビゲーションシステムである。「AR」とは、コンピュータがつくりだした仮想世界と現実の世界を重ね合わせることによって、現実の世界を補強・強化しようというもので、強化現実感、拡張現実感などと呼ばれている。一方、「ユービキタスコンピューティング」はネットワーク上の世界を実世界に繰り込んでいくことを目的としている。ネットワークとコンピュータがあまねくばらまかれていることを前提に、場所を手掛かりにして、ネットワークから情報をフィルタリングし、取得することを可能とする。

Interactive Information Lens & Navigator

この装置は、インタラクティブインフォメーションレンズ（IIL）を中心として構成されている。IILは透過型頭部搭載ディスプレイ(STHMD)に、超小型コンピュータ端末、GPS、ジャイロ等を組み合わせたものである。STHMDにより仮想世界と実世界を視覚的に重ね合わせ、GPS、ジャイロにより位置や頭部の角度を測定する。仮想世界は、位置情報を手掛かりにネットワーク上から引出した都市情報をもとにコンピュータにより生成される。ナビゲーションは、「ナビゲーター」と呼ばれる自分の嗜好を記憶した仮想世界の案内人たちによって行われる。視線、音声、3次元ポインタを使って「ナビゲーター」とコミュニケーションを重ねることで、都市は、自分の望むことをより多く語りかけてくれる。